

生活科研究のまとめ

下伊那教育会生活科委員会

I 研究テーマ

思いや願いをもって対象にかかわる中で、対象・自分・友のよさに気づき、自立して学び続ける子ども
～子どもたちの気づきの質を高めていく生活科学習を目指して～

II 研究テーマの視点

〈昨年度の研究から示唆された成果と課題〉（◇：成果、◆：課題）

～山本小学校1年1組（中村学級）「秘密基地で遊ぼう」 実践の振り返りから～

<p>【視点1】 自他との関係</p>	<p><u>子どもが材（対象）と十分にかかわり、友と思いや願い、気づきを共有できる学びの場づくり</u> ◇教師が学びの構想を基にした学びの場を子どもたちに提供することで、子どもたちは自ら活動の幅を広げていく。そのためには、「長い時間」、「繰り返し」、「継続」して活動していく必要がある。 ◇子どもたちは同じ空間・同じ時間で材とかかわりながら、思いや願いを共有していく。その過程で、豊かな学びや協力が生まれてくることが分かった。 ◇あえて問うことをやめ、教師が「待つ」という出を選択することで、子どもたちの主体的な学びが広がっていくことも考えられる。 ◇教師が「協力しよう」と子どもに投げかけるのではなく、一人で進める学びを積極的に認めていくことで、子どもたちが「協力」することのよさを自然に感得していくことができるのではないか。 ◆それぞれの子どもへの気づきをさらに友と共有できるような学びの場づくりについては今後も検討していく必要がある。</p>
<p>【視点2】 授業づくり</p>	<p><u>子どもが自ら“単元デザイン”をつくり出すような学びを引き出す教師のはたらきかけ</u> ◇教師が直接子どもの活動を支援するだけでなく、子どもたちのつながりを生み出すはたらきかけをすることで、子どもが協働して新たな学びをつくっていくことが分かってきた。 ◆教師主導にならないように、振り返りの場面では子どもたちの言葉に問い返ししながら、具体的なイメージを共有したり見通しを持たせたりするはたらきかけを心がけることが大切になるのではないか。</p>
<p>【視点3】 評価</p>	<p><u>自分自身の思いや願いを自覚化し、次の一步を踏み出すための振り返り</u> ◇教師が「基地づくり」など、学びの構想にこだわり過ぎることなく、子どもたちの思いや願いに寄り添うことを第一に考えていくことが大切である。 ◆子どもたちが本気で対象（基地づくり）に向かっているという意識を捉えた際には、教師も見通しと覚悟をもち、子どもたちと次の一步を踏み出していく。「まずは何から始めよう」といった具体的な問い返しをすることで、子どもたちが次の一步を踏み出すことにつながるのではないだろうか。</p>

本年度は、子どもたちの求めや必要感を前提に、子どもたちが自分や友だちの学びや気づきのよさを自覚化したり、子ども相互の気づきをつなげたりする振り返りの場について、1時間もしくは単元全体を通した位置づけや具体的な方法等、低学年の児童の発達段階や生活科で大切にすべきことを踏まえ、研究していく必要があると考えている。

そこで、昨年度に引き続き、次のような視点をもって研究を進めていく。

研究の視点

「自他との関係」によせて

1 子どもが材（対象）と十分にかかわり、友と思いや願い、気付きを共有できる学びの場づくり

「授業づくり」によせて

2 子どもが自ら“単元デザイン”をつくり出すような学びを引き出す教師のはたらきかけ「評価」によせて

3 自分自身の思いや願いを自覚化し、次の一步を踏み出すための振り返り

また、新型コロナウイルス感染症に対応するため、以下のような点についても、各校の実践を持ち寄り、委員会内で検討していくこととした。

1 新型コロナウイルス感染症に対応した生活科学習のあり方

◇授業時数のカットやさらなる臨時休業に対応するための学習のあり方

◇ソーシャルディスタンスを保ちながら、対話的、体験的な学習を保障するための工夫

◇調理を伴う学習活動、不特定多数の人々と関わる学習活動等、実施困難な学習活動の取り扱い

◇さらなる臨時休業に備えた生活科における家庭学習や課題についての提案

2 新型コロナウイルス感染症収束後の生活科学習にも活用できる学習形態や授業のあり方

◇くらしの中にある「ひと・もの・こと」と子どもの姿をつなぐ生活科学習のあり方

◇授業（学校における学び）と家庭（生活や家庭学習）とをつなぐ生活科学習のあり方

◇他教科と連携した学習のあり方

◇ICTを活用した生活科の授業について

Ⅲ 研究の内容

1 学び続ける個の姿とは

(1) 願う子どもの姿

生活科委員会では、願う子どもの姿（研究テーマ）を全郡研究テーマとのかかわりから「思いや願いをもって対象にかかわる中で、対象・自分・友のよさに気付き、自立して学び続ける子ども」と据えた。

(2) 「自立して学び続ける子ども」の捉え

子どもたちは、友と交流しながら対象にかかわったり活動に浸ったりする中で、新たな気付きや疑問をもつことにより、活動への意欲を高めていく。それを自らの内にため込んでいくことで自らの活動の良さを実感したり、その後の可能性を考えたりし、子どもたち自身が活動を創り上げていく（単元デザインをする）姿につながっていくのではないかと考える。このような子どもたち自身が活動を創り上げていこうとする姿を「自立して学び続ける子ども」と捉え、生活科の学びの中でそのような子どもの育成を目指したいと考えた。

2 取り組んだ研究の視点について —「自立して学び続ける子ども」の育成のために—

(1) 「子どもが材（対象）と十分にかかわり、友と思いや願い、気付きを共有できる学びの場づくり」について

・十分に追究に浸りきることのできる環境や時間の確保について

・願いや思い、気付きを互いに感得し合ったり、交流し合ったりする場の設定について

(2) 「子どもが自ら“単元デザイン”をつくり出すような学びを引き出す教師のはたらきかけ」について

- ・子どもの願いや思いの捉えに基づいた材（対象）との出会いや学びの場の設定について
 - ・子どもの活動に向かう意欲を引き出し、学びを広げる教師のはたらきかけについて（子どもたちの活動の価値付け、思いや気付きの共有や方向付けのための教師の出等）
- (3) 「自分自身の思いや願いを自覚化し、次の一步を踏み出すための振り返り」について
- ・振り返りの方法や場の設定について
 - ・子どもたち個々やグループの気付きが個の活動に生かされる振り返りのあり方について

IV 研究で明らかになったこと

〔高森南小 2年2組 「みんなで遊ぼう 思い出ホテル」(授業者：山崎 美波教諭)より〕

1 単元の概要

学校の裏山が大好きで、1年生の頃から春探しや秋探しなどをして楽しんできた子どもたちは、身近な自然を観察したり、そこにあるものを使って遊んだりする活動を通して、自然の面白さや不思議さに気付いてきた。

2年生になっても、これまで親しんできた裏山に行って活動したいと考えた子どもたちは、どんな活動をしていくか話し合う中で、クラス替えに向けての残り一年間、みんなで思い出をつくりたいと願っていった。そして、「みんなで」という言葉を大切にしながら、活動の具体についてイメージを広げ、裏山に基地や遊具等をつくり、他のグループを招待して楽しむ「思い出ホテル」を行うことになった。

《展開の概要》

学習活動	教師の支援
<p>①学習の見通しをもとう</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">【めあて】みんなが楽しめる思い出をつくろう</div> <ul style="list-style-type: none"> ・活動名、やりたい活動などを考える ・チームでどんな遊びをするか考える （「基地」「刀剣」「植物」など） ・設計図をかいたり、必要な物を準備したりする <p>②「思い出ホテル」の準備をしよう</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">◎活動（2時間）⇒振り返り（1時間）を3サイクル行う</div> <p>③「思い出ホテル」で試しに遊んでみよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・試し遊びから感じた、他のチームのよさや改善点を伝え合う <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">◎試し遊び⇒伝え合い⇒製作を2回繰り返す</div> <ul style="list-style-type: none"> * 10月20日（火）生活科委参観①（伝え合い） * 10月28日（水）生活科委参観②（製作） * 11月11日（水）生活科委参観③（製作） <p>④「思い出ホテル」で遊ぼう</p> <p>⑤活動の振り返りをしよう</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 1年次の生活科の活動やクラス替えに向けて思い出を残したいという話し合いを振り、学習の見通しをもつ場を設ける。 ○ チームで願いを共有できるように、学習カードに願いや完成予想図をかくように促す。 ○ 活動では、チームで協力し創意工夫して「遊び」をつくることができるよう、見守ったり、ともに味わったりする。 ○ 振り返りでは、友だちの気づきのよさに気づけるよう写真を提示する。 ○ 試し遊びで伝え合ったよさや改善点を活かして、もう一度自分たちで試しながら「遊び」をつくっていくように促す。 ○ みんなで思い出をつくろうと活動している姿を共感的に見守る。 ○ 写真を提示し、活動の様子を視覚的に振り返ることができるようにする。

2 子どもの姿から示唆されたこと

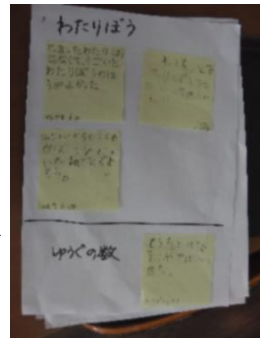
(1) 子どもたちの“やりたいこと”や切実感を捉えた教師の支援の必要性

①子どもの姿

「試し遊び」を教師が提示した画像を見ながら振り返る中で、子どもたちは「(Aチームの)「わたりぼう」は太くて渡りやすかったです」、「(Cチームのは)前よりもすごくおもしろかったです」などとそれぞれのチームの工夫のよさを語っていった。そして、「さらにみんなが楽しめる思い出ホテルにするための工夫を考えよう」という学習問題に向かい、他のチームからのアドバイスを元にして、チームごとに考え合っていた。

10月20日(火) 2回目の「振り返り」で、さらに工夫したいことを話し合うAチーム

- ・教師が『もっとうするといいよカード』(他のチームの友だちが付箋にまとめたA4判の用紙)を配布する。
- ・Aチームには、教師が事前に「わたりぼう」「ゆうぐの数」「家(きち)の大きさ」「家(きち)のこと」「シーソー」「けいひん」「けんけんぱ」の8つの観点に分類した6枚が配られる。



もっとうするといいよカード

M児 「家(きち)の大きさ」を読みながら)ねえ、基地を「大きくする」と「広くする」って一緒だね。ここまとめちゃおう。基地を大きくして広くする。(と言いながら、ワークシートの「さらにこうしたいこと」の欄に「きちを大きくして広くする」と記入する。)

H児 「家(きち)のこと」カードを見ながらM児に)もうちょっと木を増やしたりとか、もうちょっと固く縛ったりとかしたらどうかな。

M児 今(カードの表題)は「大きさ」のこと。基地のことは「のこと」で「大きさ」と違うから。

M児 (両手で山を作って)広げる、もうちょっと。

H児 じゃあ、木をもうちょっと増やしてきたら。

R児 (そんなに木が)あるっけ。

H児 長い木を持ってくるとか。

M児 腰より大きい。

H児 腰よりもっと。

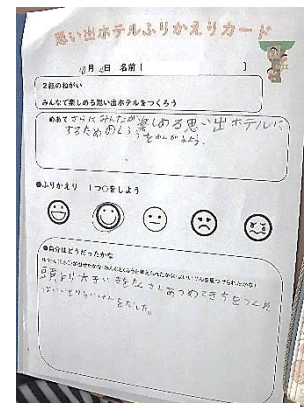
M児 首より。

H児 (チームの中で一番背の高い)Rちゃんの肩よりもっと高めの方がいいかな。Rちゃんと比べて少し高い方がいい。

R児 一応立ったりするから少し高い方がいいんじゃない。でも、Dくんどうだろう、私よりも(身長が)上だ(高い)もん。

H児 Rちゃんより高めの木を集めて、それで縛ってやればいいね。

M児 人の頭よりも高い天井ね。(ワークシートの「どうやって」の欄に記入していく)



H児のふりかえりカード

- ・H児は、M児やR児と話しながら、「頭よりも大きい木を5~7本あつめてひもでしばって立てる」とワークシートに記述する。
- ・Aチームはさらに話し合いを重ね、「けんけんぱ」「ゆうぐ」についても、さらにこうしたいという考えを記述していった。

10月28日(水)「思い出ホテル」で活動するAチーム(抜粋)

- ・H児とM児で木の枝を探して裏山の斜面を歩き回り、枝を持ってくると平らな場所にまとめて置いていく。
- ・R児は三本の木でテント状に立っていた「きち」(仮に「きちA」とする)を倒し、縛っていた紐を外す。
- ・M児は少し離れた場所に立っていた「きちB」にかかっているブルーシートを広げたり引っ張ったりして調整し、地面(床)の部分にも地面が見えないようにシートを広げていく。入って中からシートの状態を見て様子確かめては、外に出て調整することを繰り返していく。
- ・しばらくすると、H児とR児もやってきて、「窓にすればいい」などと言いながら、シートの端を木の枝を縛ってある紐の端で結び、シートの端がめくれ上がって隙間ができ、中から外の様子が見えるようにする。
- ・代わる代わる「きちB」に入って中の様子や窓からの見え方を確かめた後、「きちA」の立っていた場所に行く。S児を加えた4人で集めておいた木の枝と「きちA」で使っていた木の枝を合わせて6本ほどを束ね、先の方をビニール紐で縛る。
- ・束ねた木を起し、下の方を広げて立てようとする、H児が「待って(紐が緩んだから)もう一回しばる」と言って、一度縛った紐をほどいて縛り直す。
- ・木の束をテント状に立てることに成功したが、かなりの高さになったためブルーシートをかけられない。「せえの」とかけ声をかけて、4人で代わる代わるシートを投げ上げるようにして木の先に掛けようとする。他のグループの男子の手も借りて何とかかけることができたが、木の枝が長く背が高いため、床にしたい地面までシートがかからない。
- ・M児、H児が短い木の枝をたくさん集めて地面に並べることを繰り返し、「椅子」を3人分作って、中に入って座り心地を確かめる。
- ・活動の様子を見に来た教師にも中に入るように促し、笑顔で教師の感想を聞く。



「きちづくり」の他にも、「わたりぼう」がちょうどいい難しさになるように、何度も渡りながら調整したり、太い木の幹の周りを張り出した根に乗って落ちないように一周回る遊びづくりをしたりして、様々な活動をチームの友だちと楽しんだ後、H児は隣のBチームの様子を見に行く。

- ・自分たちと同じように、すり鉢状になった窪地に木の束をテント状に立てようとしているBチームの子どもの様子を少し高いところから黙って見ている。
- ・立てようとした木の束を結んだ紐が緩み、結び目が下がってしまうのを直そうと、Bチームの子がその上からさらに紐を重ねて結ぼうとしているのを見て、「一回ほどいて、もう一回結び直した方がいいよ。私たちも(そうだった)」と声がけする。
- ・しばらくBチームの様子を見ているが、集合の笛が鳴り、斜面を下りて教室に向かう。

②子どもたちの姿から示唆されたこと

視点3 **自分自身の思いや願いを自覚化し、次の一步を踏み出すための振り返り** について

- ・ Aチームの子どもたちは、振り返りの翌週の活動では、まずやりたかった「きちを広くすること」に取りかかった。しかし、Aチームの子どもたちの活動はそれだけにとどまらず、「わたりぼう」や新しい遊びなど多岐に渡っており、とにかく活動したいというエネルギーにあふれていた。「思い出ホテル」で「みんなで」楽しい思い出をつくりたいという願いが活動のエネルギーにつながっているのではないと思われる。全体で振り返る場をもつことが必要になることもあるが、振り返りありきではなく、“子どもたちが本当にやりたいこと”を見極め、必要な支援をしていくことの大切なのではないだろうか。

視点1 **子どもが材(対象)と十分にかかわり、友と思いや願い、気づきを共有できる学びの場づくり**

について

- ・ 28日(水)の活動の中では、教師が子どもたちと同じフィールドで材に浸り込みながら子どもと共に活動していた。他のチームの子どもたちとの関わりも自然に生まれ、友だちが困っていることに対して手伝ったり、アドバイスしたりする姿が見られた。AチームのH児は、隣で活動していたBチームの様子を見に行き、自分が経験したことをアドバイスとして自然に伝えていた。この姿はまさに、自らが材とかかわって得た「気づきを共有」していった姿と言えるのではないと思われる。全員に一斉に振り返る場面を設けるだけでなく、困っているチームの切実感を捉え、話し合ったり助言し合ったりする機会をもつことで、子どもたちにとってより自然な振り返り(気づきを共有する場)となるのではないだろうか。

(2) 子どもたちの“やりたいこと”を支え、共に楽しむ教師の立ち位置

①子どもの姿

11月11日(水) A児とともに活動するK児①

- ・ K児は、隣で他の子が竹の橋に乗って遊んでいる横で、「やるよ」と声をかけながらたまった落ち葉をかき出したり、大きな石をどかしたりして、束ねた4本の木を立てる場所を作る。
- ・ 竹の橋で遊んでいた子が別の場所に行きA児と2人になると、「2人じゃ無理だから」と言うA児に、「遊んでる場合じゃないね」と返し、じゃまになる石などをどかして、基地を立てようとする地面を整えていく。
- ・ 一度は立てたが一旦倒しておいた木の束(骨組み)を二人で起こしながら、A児が「でも、入口どうする、こっちにすると。こっちから入るじゃん」と言う。
- ・ K児は、「ちょっと待って」と言いながら束ねた骨組みの脚を広げると、「これ反対じゃない。なんかおかしいよ」と言い、結び目の部分をよく見ながら考えている。
- ・ 二人で脚を一本ずつずらして調整し、立てようとするが、結び目が緩んで下に下がりバランスが悪くなる。
- ・ K児が「でも大丈夫そう。(A児に)ここ持って」などと言いながら、二人でいくつかの脚を動かして位置を調整していく。
- ・ K児は、結び目を直しながらA児に「石で止めて」と言うと、A児はK児がどかしておいた大きな石を持ってきて、脚の側に置く。



それまで二人が試行錯誤する様子を離れて見守っていた教師は、「そこ、まだまだユラユラし

てるの」と声をかけた。

11月11日(水) A児とともに活動するK児②

- ・教師に、「このままだとこっちに倒れそうだね。どうする」と問われると、A児が「もう一回やる（結び直す）か。ゆるすぎだし」と言い、二人で結び目を触っている。
- ・K児が4本の木の組み合わせを見ながら、一本一本について「これがこっちで、これがこっちで、これが…こっちか」と言いながら、木の傾きを調整する。それを聞いて、A児が「ああ、そうか、これがこけすぎ」と、傾いた一本の木を持ち上げる。
- ・持ち上げながら脚を広げようとしていると、チームのもう一人がやってきて手を貸すがそれでも安定せず、脚の位置や木の傾きを調整することを繰り返す。
- ・K児が「棒が5本あった方がいいかな」とつぶやきながら、結び目の辺りを気にしている。
- ・その様子をにこやかな表情で見ていた教師に、「それもあるかもしれないね。今度はどっちに倒れそう」と問われると、K児はA児に「ちょっと放して」と言う。自分も木から手を放すと、木が自分の側へ倒れてくる。
- ・さらに教師に「今、木ってどっちにたくさんある」と問われ、K児は「こっち（自分の立っている場所とは反対側）の方」と指をさしながら答える。
- ・教師が「こっち（K児の反対側）に木がいっぱいあって、こっち（K児側）に倒れるんだよね。じゃあどうしたらいいかなあ」と言われ、教師と一緒に木の傾きや位置を調整していく。
- ・教師が木から手を放し、K児が一人でバランスをとろうとする。K児の左へ一本の脚を広げて手を放すと、「あっ、立った」とつぶやく。そして、結び目の辺りを確認するように見上げる。
- ・その様子を見た教師が拍手すると、両手を握りしめガッツポーズをする。



②子どもたちの姿から示唆されたこと

視点2 子どもが自ら“単元デザイン”をつくり出すような学びを引き出す教師のはたらきかけ

について

- ・自分たちが“やりたいこと”に試行錯誤しながら取り組むK児とA児の学びの姿を、教師は少し離れたところから声をかけずに見守っていた。なかなか思うように骨組みを立てることができない二人の様子を見て、考えさせるような声かけをしたり、時には少し手を貸したりしながら、最後はK児が自分の力で基地の骨組みを立てることができるように促していった。また、教師は子どもたちが「思い出ホテル」でどんなことを見つけ、どんなことを楽しんでいるのかを捉えながら、常に子どもと目線でその楽しさを味わおうとしていた。子どもたちが自らの力で問題を解決するように促したり、子どもたちと同じ目線で楽しさを味わおうとしたりする教師のはたらきかけによって、子どもたちは自分たちの追究に満足感を得るとともに、次の課題を見つけ、さらなる楽しさを味わおうとしていくのではないかと考える。

3 「もう思い出ホテルには来られないの」 — 授業者の省察 —

子どもが必要としている振り返りとは何なのかを考えるよい機会となった。活動と振り返りのサイクルをつくることで、確かに教師にとっては子どもの変容が捉えやすくなる。その反面、2年生に書く振り返りばかりを求めてしまったため、子どもも教師も苦しさを感じていた。子どもたちは、活動の中でチーム内だけでなくチームをこえてアドバイスをし合った

り、相談し合ったりしていたし、「いいね」、「それ欲しいな」、「真似してみようかな」など、互いの取組を価値付ける言葉をかけ合っていた。子どもの立場に立って考えたとき、振り返りには様々な形があるのだということが見えてきた。

「思い出ホテル」の最後は、木の滑り台にブルーシートを敷いてその上をビニール袋で滑ることでスピードを出したり、植物チームは調べた植物をファイルにまとめて見せながら説明をしたりするなど、それぞれのチームがみんなに楽しんでもらおうと工夫していた。

裏山というフィールドで、自分がやりたいことを思いきりできたことは、子どもたちにとってのよい思い出となっただろう。しかし、それ以上にクラスの「みんなで」楽しめる「思い出ホテル」にしたいという願いに向かって、考え、伝え合い、協力し合ったこと、がんばった分みんなが喜んでくれたことなど、一人ではなくみんながいたからできた一つ一つのことが子どもたちにとってかけがえのない思い出になったのだと考える。活動後には、子どもたちから「もう思い出ホテルには来られないの」という声があがり、それだけ思いをかけて活動していたのだと改めて感じる事ができた。

V 本年度の研究の結果から次年度さらに研究すべき課題は何か

取り組んだ研究の視点のうち、特に視点3「自分自身の思いや願いを自覚化し、次の一步を踏み出すための振り返り」については、「振り返りの方法や場の設定」、「気づきが個の活動に生かされる振り返りのあり方」等について研究してきたが、設定した「振り返りの場」が子どもたちの必要感に基づいたものになっているかをさらに検討していくことが大切になるだろう。まだまだ活動したい子どもたちに対して、教師側が振り返りを強いている場合もあり、振り返りの機会を設定するにあたっては、子どもの意識をていねいに捉えていく必要性を感じている。

次年度は、子どもたちの求めや必要感を前提に、子どもたちが自分や友だちの学びや気付きのよさを自覚化したり、子ども相互の気付きをつなげたりする振り返りの場について、低学年の児童の発達段階や生活科で大切にすべきことを踏まえ、研究していきたいと考えている。

VI 新型コロナウイルス感染症に対応した生活科・収束後の生活科学習のあり方について

— 生活科委員会における情報交換の中で話題になったこと —

◆交流活動について

- ・異学年の交流やお世話になった方へのお礼等、例年のように対面して気持ちを伝え合う機会を持ちにくい、だからこそ手紙等を書くといった言語活動を子どもたちの求めに応じて自然に取り入れることができるのではないか。「直接」だけでないつながりができる機会と捉えることもできるのではないか。

◆調理等リスクの高い活動について

- ・できる時に思い切りやっておくことが大切で、できない状況になった時に、できていた時の経験が生きてくるのではないかと。感染の波が来たときにどうすればいいのかを子どもたちと考えていけば良いのではないかと。

◆視聴覚機器・ICTの活用について

- ・子どもの気づきを広げようとする、その子の近くに子どもが密集してしまうことがある。それが自然な話し合いだと思いが、どうしていったらいいのか判断に困る場面がある。視聴覚機器やICTなどの活用も考えられるが、本物を見合う場面とICT等の活用は使い分けていく必要があるのではないかと。
- ・教育におけるICTの活用は今後進化し続けていくだろうが、不易なものとして残るのは、「子どもや材を見つめる先生方の感覚」なのではないだろうか。機器を使ったとしても、生活科や授業で不易なものとして受け継がれてきたことやその本質は変わらない。

- *委員会内で情報交換する中で、コロナ禍だからこそ生活科で大切にしなければいけないことが見えてきた。次年度も引き続き、委員会内で話題にし、必要に応じて発信していきたい。